

J・ポール・ゲティ美術館コレクション

フェリーチェ・ベアトの東洋

Felice Beato: A Photographer on the Eastern Road

会期: 2012年3月6日(火) ~ 5月6日(日) 56日間

会場: 東京都写真美術館 2階展示室

主催: 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/
東京新聞

協賛: アメリカ大使館/凸版印刷株式会社/

アサヒビール芸術文化財団/東京都写真美術館支援会員

This exhibition has been organized by the J. Paul Getty Museum, Los Angeles



1

< 展覧会概要 >

2012年3月6日より東京都写真美術館ではJ・ポール・ゲティ美術館コレクション展「フェリーチェ・ベアトの東洋」を開催いたします。フェリーチェ・ベアト(1832-1909)は幕末に日本へ訪れ、20年以上の長きにわたって横浜に滞在した写真師です。本展はアン・ラコステ氏によって企画され、2011年4月までアメリカ・ロサンゼルスにJ・ポール・ゲティ美術館で開催されたレトロ・スペクティブの国際巡回展です。日本唯一の開催となる本展では、東京都写真美術館が誇るベアトコレクションも加えた約150点で、さらに充実した内容で展覧します。

“幕末のタイムカプセル”

ベアトは幕末～明治という激動期の日本に滞在して多くの写真を制作したことから、日本でもっとも注目されるこの時代の訪日写真師です。元治元(1864)年の下関戦争において英国軍に占領された長州藩の前田砲台の写真は、多くの教科書に掲載されており、多くの人が一度は眼にした写真でしょう。

また、文久三(1863)年～元治元(1864)年頃に撮影された愛宕山から江戸市中を鳥瞰したパノラマ写真は、昨年の幕末ドラマ(TBS「JIN-仁」)でオープニング映像に起用され広く注目される写真であり、また現東京都知事が知事室に飾るほど好むという、当時の江戸を代表する作品でもあります。これは幕末期の日本の首都を詳らかにする歴史資料であると共に、卓越した技術によって支えられた写真作品なのです。



2 (参考写真)



3

フェリーチェ・ベアトの好奇心にあふれるドラマチックな人生と彼の残した写真は、没後100年を経た今でも19世紀を詳らかにするタイムカプセルなのです。

“日本初のレトロ・スペクティブ”

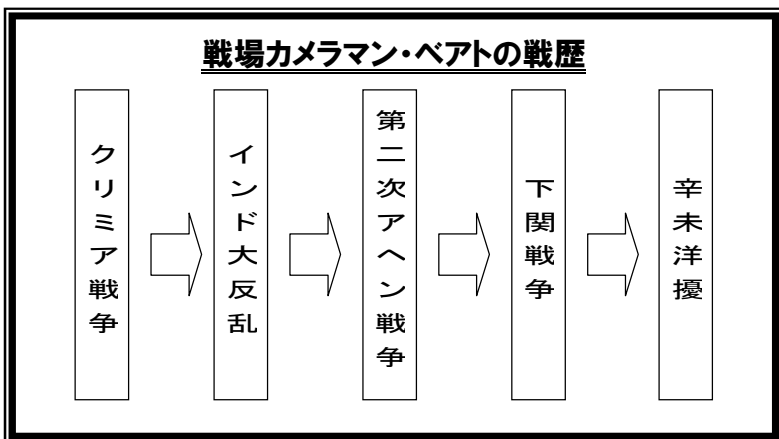
本展ではとてもエキサイティングな試みがなされています。いままで日本で語られたベアトの多くは、幕末の日本における活躍についてでした。しかし今回は、日本ではじめて、彼の生涯にわたる仕事全体を広く見渡すレトロ・スペクティブ(回顧)としての性格を持っていることです。今回ご紹介するJ・ポール・ゲティ美術館コレクションはすべて日本初公開です。特にインド、中国、朝鮮、ビルマの作品は、いままで見ることのなかった激動の「東洋」の姿を目にするとともに、そこに隠された真実を知ることになります。



4

“戦場カメラマン・ベアト”

ベアトは、クリミア戦争から写真師としてのキャリアをスタートし、インド動乱(セポイの乱)、中国の第二次アヘン戦争へと取材しながら東へ東へと旅します。そして、文久3(1863)年に日本を訪れて20年以上の長きにわたって横浜に滞在、着彩された美しい鶏卵紙の風俗写真や、江戸・横浜のパノラマ写真を含むランドスケープなど、多くの写真を制作するとともに下関戦争も取材しています。また、日本滞在中には米朝戦争(辛未洋擾:しんみようじょう)も取材し、まさに“戦場カメラマン・ベアト”と言えるほどに戦争を記録してきました。それらの作品からは、ベアトならではの技術や工夫、そして、さまざまな事情やニーズに応えるプロとしての姿勢を垣間見ることが出来ます。



- <出品予定作品>** 出品点数：約 150 点 (予定)
- 初期作品： 1855年-57年頃 (クリミア戦争など)
 - インド： 1858年-1860年
 - 中国： 1860年
 - 日本： 1863年-1884年
 - 朝鮮： 1871年
 - ビルマ： 1887年-1905年



5



6



7



8



9

フェリーチェ・ベアトのエピソード

1832年 ベネチア生まれ
コンスタンティノープル育ち（同地で写真技術習得）
英国軍の侵攻に伴ってアジアへ
日本に20年滞在（起業家への転身と破滅）
ビルマでの再起と成功

★廃虚に放置された敵側の死体や散乱する骨など、戦場の悲惨な実態を表現

1858年2月、インド大反乱後の光景を撮影した際、ベアトは英国軍の勝利を祝うイメージとして記録することに専念した。インド大反乱の主な舞台となって集団処刑と大虐殺が行われたデリー、カウポール、ラクナウの彼の写真は、当時としては例外的であった。ビクトリア時代の繊細な感性を重んじた他の写真師たちは、戦時の大量殺戮をそのまま写真に撮ることは避けていた。ベアトは、廃虚に放置された敵側の死体や散乱する骨など、戦場の悲惨な実態を表現した初めての写真師だった。



10

★スイス全権大使に同行して外国人遊歩区域外の江戸を撮影

1863年8月、ベアトとワーグマン、エメ・アンペールの日本国内旅行に同行し、ベアトは、横浜、下関、鎌倉、金沢村ほか京都や江戸の規制区域内を写真に撮る。条約に基づく正式な遠征旅行に出かける遣日スイス全権大使、エメ・アンペールに同行し、彼の庇護の下で、規制されていた地域に足を踏み入れることが出来た。彼らは立入り規制区域である江戸の幕府公邸にも滞在した。この時に、「愛宕山から見た江戸のパノラマ」も撮影されたものと考えられる。この写真は銅版画に起こされて「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」紙（1864年10月29日号）に掲載された。

★辛未洋擾を取材、クライアントである米国軍の勝利として写真を制作

1871年5月と6月、ベアト、米国海軍遠征隊の公式写真家として、辛未洋擾(しんみようじょう)を取材するため朝鮮を訪れる。ベアトは、1871年5月16日に艦隊とともに日本を離れ、朝鮮で撮影して6月28日に上海に帰還した。彼はこの時、軍人乗組員の数多くの肖像写真と艦隊の写真、それに現地の風景や戦場の写真など、およそ47枚の写真を持ち帰っている。ベアトはインド・中国で行ったように、敵側の死者を写した戦場写真も制作。これらの写真は、実際には敗走した西洋の勝利を記念するものとして作られている。占領した砦に立ってポーズを取る部隊の集合写真や、最も注目し値する画像の1枚で、大きな朝鮮旗の前に立つ将校たちの写真がそうである。この軍事行動がベアトの国際的評価をさらに高めた。



11

★写真家から貿易商・投資家へ

1867年に加盟したフリーメイソン会員名簿で1871年にベアトの職業、フリーメイソン横浜支部の名簿では、「写真家」から「貿易商」に変わる。1870年にはその脆弱な造りから「ベアトの爪楊枝」とあだ名された一連の平屋を販売する。68 また横浜のブラフガーデン造営資金調達にも積極的に関わろうとした。1873年8月には、駐日ギリシャ総領事に任じられる。同年の彼は、落成したばかりの横浜グランドホテルのオーナーの一人でもあった。

<関連イベント>

■担当学芸員によるフロアレクチャー

日程：第1・3金曜日 16:00～および 2012年4月29日（日・祝）、
4月30日（月・代）～5月6日（日）14:00～（約1時間程度）
※展覧会チケット（当日有効）をお持ちの上、展示室前にお集まり下さい。

■鶏卵紙ワークショップ

当館収蔵のフェリーチェ・ベアトのイメージを使って、彼が用いた印画方式を体験できるワークショップです。

日程：2012年4月1日（土）、4月7日（土）各 10:00-17:00 1日1コース 事前予約制
※申込み方法等、詳細は館内配布のワークショップチラシやホームページでお知らせします。

■講演会

「幕末のタイムカプセル：フェリーチェ・ベアトの日本」

日程：2012年4月15日（日）18:30～20:00

講師：高橋則英（日本大学芸術学部写真学科教授）

会場：東京都写真美術館 1階ホール（定員 190名）

対象：展覧会チケット（当日消印）をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

受付：当日 10:00 より当館 1階受付にて整理券を配布します。整理番号順入場、自由席。

※講演会「幕末のタイムカプセル：フェリーチェ・ベアトの日本」は、展覧会場閉室後の開催のため、講演会前に展覧会をご覧ください

<関連図録のご案内>

本展に合わせ、2011年4月までJ・ポール・ゲティ美術館（ロサンゼルス）で開催されたレトロ・スペクティブ展のカタログに併せて全テキストを翻訳、別冊としてまとめました。カタログと2冊組で販売します。

『Felice Beato: A Photographer on the Eastern Road』

別冊付き（全テキストの日本語訳、フェリーチェ・ベアト略年譜、関連年表を掲載）

価格未定

<開催概要>

展覧会タイトル：フェリーチェ・ベアトの東洋

Felice Beato: A Photographer on the Eastern Road

展覧会会期：2012年3月6日（火）～5月6日（日） 56日間

会場：東京都写真美術館 2階展示室

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞

協賛：凸版印刷株式会社／財団法人アサヒビール芸術文化財団／東京都写真美術館支援会員

協力：日本航空

特別助成：アメリカ合衆国大使館

開館時間：10:00～18:00（木・金は20:00 入館は閉館の30分前）

休館日：毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌火曜日）ただし、5月1日（火）は開館

観覧料：一般 800(640)円／学生 700(560)円／中高生・65歳以上 600(480)円

※（ ）は20名以上団体料金および東京都写真美術館友の会会員 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関：JR 恵比寿駅東口より徒歩7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分

※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください

<お問い合わせ>

東京都写真美術館 事業企画課 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033

展覧会担当：三井 圭司 k.mitsui@syabi.com

山崎 尚之 n.yamazaki@syabi.com

Aleksandra Fedorowicz-Jackowska

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com、平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

このリリースに掲載している図版をプレス用にデータでご用意しております。前項の広報担当までお申し出ください

リリースに掲載されている作品図版のキャプション

- 1) フェリーチェ・ベアト 冬着姿の女性 1868年 鶏卵紙に手彩色 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 2) フェリーチェ・ベアト 下関・前田砲台を占領した英国軍 1864年 鶏卵紙 東京都写真美術館蔵 ※参考写真のためデータのご用意はございません
- 3) フェリーチェ・ベアト 愛宕山から見た江戸のパノラマ [部分] 1863-64年 鶏卵紙 東京都写真美術館蔵
- 4) フェリーチェ・ベアト 最初に公式文書運んできた朝鮮のジャンク 1871年5月30日 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 5) ジェイムズ・ロバートソン、フェリーチェ・ベアト スルタンアフメト・モスク 1853-1857年 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 6) フェリーチェ・ベアト フサイナーバード・イマームバラ宮殿とモハメッド・アリ・カーンの墓。1858年3月のサー・コリン・キャンベルによる2回目の攻撃[ラクナウ] 1858年 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 7) フェリーチェ・ベアト 長弓を持つ侍 1863年 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 8) フェリーチェ・ベアト カチン族の女性 1887-1893年 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 9) フェリーチェ・ベアト ザガイン寺院内の49体の釈迦像 1887-1895年 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 10) フェリーチェ・ベアト 第93高地連隊と第4パンジャブ連隊による2千人の反乱兵虐殺後のシカンダルバー宮殿の内部。1857年11月のサー・コリン・キャンベルによる最初の攻撃 1858年 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography
- 11) フェリーチェ・ベアト 朝鮮軍将軍旗「帥字旗」 1871年6月 鶏卵紙 J・ポール・ゲティ美術館蔵 ©The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Partial gift from the Wilson Centre for Photography

1832年 (0歳)	フェリーチェ・ベアト、イタリアのヴェニスに生まれる。
1834年 (2歳)	ベアト一家、英国保護領となっていたギリシャのコルフ島に移住。ベアト、後に英国に帰化。
1851年 (19歳)	フェリーチェ・ベアト、初めての写真レンズをフランスのパリにて 25 フランで購入。
1853-1854年頃 (21-22歳頃)	ジェームズ・ロバートソン、コンスタンティノープルのペラ (ガラタ) 地区に写真スタジオを開く。4月19日、ロバートソン、ベアトの妹のレオニルダ・マリア・マティルダと結婚。ロバートソン、夏の終わりにロジャー・フェントンに代わり、クリミア戦争に赴いた英国遠征隊の取材プロジェクトに就き、バラクラヴァやセヴァストポリを含め、さまざまな戦場を撮影。
1856年 (24歳)	ロバートソン、フェリーチェ・ベアトをクリミアに派遣。4月から7月にかけて、当地で戦後の光景を撮影。
1857年 (25歳)	ロバートソンとベアト兄弟、聖地を巡る旅行に出発。3月にエルサレムに到着し、そこで英国総領事館の記録簿に登録される。同市の記念碑や考古学的遺跡、イスラム建築物などを撮影。さらにカイロ、アテネ、シリアを訪問。最古のコンスタンティノープルのパノラマ写真をロバートソンが制作、フェリーチェ・ベアトが助手を務めた可能性が高い。同年、本作をロバートソンがスコットランド王立協会での展覧会で披露した。
1858年 (26歳)	1月、ロバートソンとベアト、ロンドンの建築写真協会写真展に初めて連名で出品。 ★2月13日、インド大反乱後の光景を撮影すべく、スエズ経由でインドのカルカッタに到着。 4月初旬、ラクナウで暴動の現場を撮影。8月下旬、ラクナウを写したベアトの写真がカルカッタで市販される。
1859年 (30歳)	2月22日、「フォトグラフィック・ジャーナル」誌、「クリミア戦争の主な舞台となった、壮麗で美しい街、ラクナウ」の写真シリーズ 26 点の展覧会記事を掲載。
1860年 (31歳)	1月と2月、建築写真協会が、ロバートソンとベアトの手になるイスタンブールとエルサレムの写真を含む展覧会を開催。2月26日、第二次阿片戦争最後の軍事作戦の指揮官、サー・ジェイムズ・ホープ・グラントと共に中国に向けて出航。3月中旬に香港に到着。香港初のパノラマ写真を制作。 4月、広東を訪れて撮影。5月、「イラストレイティッド・ロンドン・ニュース」紙特派員であるチャールズ・ワーグマンと共に中国本土入り。5月下旬、二人は同盟軍の軍事遠征に同行して中国北部へ。 7月、大連湾で撮影。8月、英仏連合軍が、北京から約 160 キロ南東の大沽砦を攻撃。英軍占領後の同砦を撮影。 10月13日、連合軍北京入城。北京の円明園を撮影。その後、円明園が焼け落ちる姿だけでなく戦場も撮影する。 11月2日、恭親王とエルギン卿の肖像写真を制作。12月、ワーグマンと共に香港へ帰還。
1861年 (32歳)	5月、ベアトは、イングランド、バーミンガムの写真協会で写真を展示。
1862年 (33歳)	6月、文芸誌「アサニーアム」、写真評を掲載。 7月には「ブリティッシュ・ジャーナル・オブ・フォトグラフィー」誌が写真評を掲載。
1863年 (34歳)	5月、ベアトとワーグマン、ボンベイを離れ、香港経由で上海に向かう。 6月、ワーグマン、横浜に到着。同じ頃、ベアトも横浜に到着した可能性がある。 ★8月、ベアトとワーグマン、エメ・アンペールの日本国内旅行に同行し、ベアトは、横浜、下関、鎌倉、金沢村ほか京都や江戸の規制区域内を写真に撮る。
1864年 (35歳)	ベアトとワーグマン、共同経営会社「ベアト・ワーグマン商会」を登録。1867年まで継続。下関戦争を取材。 ★10月と11月、「イラストレイティッド・ロンドン・ニュース」紙に、ベアトの日本の写真を基にした景観が掲載される。コンスタンティノープルで、タイトルページにロバートソンとベアトの名が入った、「Jerusalem: Album Photographique (エルサレム写真帖)」が出版される。
1865年 (36歳)	6月、出島ほか長崎の名所を撮影。7月、上海を再訪。
1866年 (37歳)	旧暦 10月 (新暦 11月)、閩内大火 (豚屋火事) により、ベアトのスタジオや資材を含め、街の 3分の2が焼失。
1867年 (38歳)	3月から5月にかけて、「レヴァント・ヘラルド紙 (イスタンブール)」掲載の広告で、ロバートソンとベアトが制作したイスタンブール、アテネ、エルサレム、カイロ、マルタの写真を彼らの写真スタジオで販売する旨を広告。 ★フリーメイソン横浜支部に入会。 4月30日、カルカッタのベンガル写真協会の会合で、彼の中国と日本の写真が高く評価される。助手の目下部金兵衛と共に上海に短期滞在。12月中旬に横浜に戻る。 最初の日本写真帖「写真で見る日本：数年に渡る滞在に基づく知識と信頼できる情報源による歴史観で編纂された解説付き」2巻を出版。
1869年 (40歳)	ベアト、横浜の写真を撮り続け、スタジオに訪問客を受け入れる。
1870年 (41歳)	アンペールの『幕末日本図絵 (Le Japon illustré)』に、ベアトの写真を基にした数多くのイラストが掲載される。 ★ベアト、土地投機を含め、さまざまな投機的事業にますますのめり込むようになる。
1871年 (42歳)	★5月と6月、ベアト、米国海軍遠征隊の公式写真家として朝鮮を訪れる。 9月、彼の朝鮮の写真に基づく版画が数枚「ハーパーズ・ウィークリー」紙に掲載される。横浜に戻る途中、ベアトとウーレット、神戸・大阪地区に立ち寄り、直近の台風の余波を撮影。 ★ベアトの職業、フリーメイソン横浜支部の名簿では、「写真家」から「貿易商」に変わる。
1872年 (43歳)	10月、ベアト、横浜・東京間を走る日本初の鉄道を撮影。 12月、アレクシス大公とスヴェトラナ号の将校たちを同艦甲板で撮影。ベアトの写真がフォッグの旅行記、「Round the World (世界一周)」に掲載される。
1873年 (44歳)	ベアトのスタジオ、「F. ベアト商会、ベアト、J. ゴダート、助手の H. ウーレット」として名簿に載る。 8月6日、ベアト、駐日ギリシャ総領事に任じられる。 8月16日、ベアトら投資家が、横浜海岸通り角のグランドホテルの落成式を行う。
1874年 (45歳)	ベアトのスタジオ、「F. ベアト商会、17 番地、写真家、フェリックス・ベアト、H.ウーレット」として名簿に載る。ベアト、金融取引を巡って数件の訴訟に巻き込まれる。エメ・アンペールの『幕末日本図絵』の英語版 (“Japan and the Japanese Illustrated”) が出版される。
1875年 (46歳)	フェリーチェ・ベアト、写真スタジオとして、「F. ベアト、写真家、F. ベアト並びにマネージャーの H.ウーレット」、貿易商として、「F. ベアト商会、フェリーチェ・ベアト、H.エングルハーツ、倉庫あり」と、両方で登録。 3月、ベアトに対し、8,802 ドルの審判が下されるも、後に上海の最高裁に上訴して半減される。 10月、お抱え料理人に皿を投げつけたとして、英国の治安判事に罰金を科せられる。同事件は 12月にジャパン・パンチ誌で報じられる。
1876年 (47歳)	ベアト、17 番地所在の、「F. ベアト商会、写真家、フェリーチェ・ベアト並びに助手、H.ウーレット」として名簿に載る。H. エングルハーツと一緒に手掛ける、荷主・一般輸入業は、37番地に所在登録。 5月と11月、ベアト、ジャパン・パンチ誌で風刺される。7月、グランドホテルから家具を盗んだとして非難されるが、「その物を所持していないことを誓約」して訴訟を免れる。

- 10月、ベアトの写真スタジオ、ヨーロッパ人三人が窓数枚に投石するという蛮行によって破壊される。
- 1877年(48歳) 1月23日、ベアト、写真スタジオの在庫並びに営業権の売却を告知広告。
2月、事業を、主たる競合相手の一つ、ライムント・フォン・シュティルフリート男爵とヘルマン・アンデルセンが共同経営する会社に売却。金融投機家兼貿易業者として投機的事業に乗り出す。
4月から10月にかけて、さらに数々の訴訟に巻き込まれる。ベアト、写真家としての登録はそのままに、「F. ベアト商会、写真家、フェリックス・ベアト、H. ウーレット」として名簿に記載。荷主・一般輸入業務は、エンゲルハーツと共に57番地に所在登録。
- 1878年(49歳) 1月、ベアト、「グランドホテル横浜に関し…いかなる債務責任も負わない」旨を公告。
7月、訴訟の審判で450ドルの賠償金を得るが、上海の最高裁への上訴で取り消され、諸費用を負担させられる。今や民間人として地元の人名録に記載される。H. エンゲルハーツと組む貿易商として、ベアト商会を24番地bに所在登録、自宅は5番地。
- 1879年(50歳) 4月と5月、ベアト、金融投機について再び「ジャパン・パンチ」誌で風刺される。横浜で冒険的事業を継続し、数多くのイベントやパーティーに出席。貿易商としては、1878年と同様の記載。
- 1880年(51歳) 「ジャパン・パンチ」誌、年間を通じてベアト風刺を行う。
12月初めにベアトはオフィスを焼失。香港クロニクル紙の人名録に、「貿易商」として載る。貿易商としては、1877年、1879年と同様の記載
- 1881年(52歳) 4月、ベアト、再び「ジャパン・パンチ」誌で風刺される。
10月、日本に赴くジェイムズ・ロバートソンのために、コンスタンティノープルでお別れディナーが開かれる。ベアト、相変わらず横浜の人名録に民間人及び貿易商として載る。
- 1882年(53歳) 1月、ジェイムズ・ロバートソン一家が横浜に到着。この年の後半、フランス人写真家のウーゴ・クラフトがコロディオン乾板(dry-collodion plate)を用いて、ベアトとその姪、そして恐らくロバートソン一家であろう者たちの集合写真を、政治家、西郷従道の屋敷で撮影。ベアト、再びジャパン・パンチ誌で風刺される。ベアト、5番地に自宅のみの記載。
- 1883年(54歳) 8月、横浜洋銀取引所の日本人仲買人が契約を履行しなかったとして申し立てる。この事件に関連して多くの両替商が逮捕されたとの報道。
- 1884年(55歳) 横浜の洋銀相場への投機で全財産を失ったと報じられる。一文無しの状態で11月29日に日本を離れ、テヘラン号で上海、香港、スエズを経由しながら、最終的にエジプトのポートサイドに到着。
- 1885年(56歳) 英国に対するマフディーの反乱取材のためにスーダンに赴くが、主要な戦闘の3か月後に到着。
4月30日、スエズからスアキムに向かう船上で、G. J. ウルズリー男爵に出会い、部隊の撤退を監督する為にスアキムに向かう遠征隊を記録することになる。ベアトはロンドンへ戻り、9月にはスーダンで撮影した画像の著作権を確立するも、1点も売れず。
- 1886年(57歳) 2月18日、ベアト、ロンドン、地方写真協会で自身の写真技法について講演し、作品を展示。
横浜のファルサーリのスタジオ、火事でベアトのネガを含め焼失。
- 1887年(58歳) ランゲーン・タイムズ紙、6月30日に、リヴァプールからマルタバン号に乗船した最初の客として、「セニョール・ベアト」のことを伝える。ランゲーン・ウィークリー・バジェット紙も同様のことを伝えるが、彼のことを「ピアテス」と呼んでいる。
- 1888年(59歳) ジェイムズ・ロバートソン、4月18日に横浜で死去。5月、上ビルマに赴いて、ディシルヴァ(D'Silva*)という名の写真家が立ち退いたスタジオを引き継いだとされる。
- 1889年(60歳) 1月、マンダレー義勇兵を撮影。
12月、クラレンス・アヴォンディル公ヴィクター皇太子のマンダレー訪問を写真に収める。
- 1890年(61歳) 9月、ベアト死去の誤報が、ノース・チャイナ・ヘラルド紙に載る。同月、在ビルマのハンブシャー騎馬歩兵を撮ったベアトの写真を基にした複製画が「イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ」紙に掲載される。
- 1891年(62歳) 2月8日、横浜でワーグマン死去。
カルカッタのサッカー・アンド・スピנק社の「インド名鑑」に、助手のフランク・グラスと共にマンダレーの「風景写真家」として載る。英国に対する反乱の鎮圧にウンソに遠征するウルズリー元帥に同行。
- 1892年(63歳) 変わらずマンダレーで仕事をしており、サッカー社の「インド名鑑」に、B. ライアンとF. バレイリーを助手として抱える「F. ベアト、写真家」として載る。
- 1893年(64歳) 「イングリッシュ・イラストレイティッド・マガジン」誌の記事にベアトの写真8枚が含まれる。サッカー社のインド名鑑に、F. バレイリーとH. C. スミス助手として抱える写真家として載る。後者とは10年、共に仕事をするようになる。
- 1894年(65歳) ベアトの事業は、マンダレーのC通りに位置し、二人の助手を抱える「写真スタジオ等」として名鑑に載る。
- 1895年(66歳) サッカー社の「インド名鑑」、ベアトの事業を、「写真スタジオ兼雑貨商」として記載。H. C. スミスはベアトの簿記係となり、D. モール、A. ウィリアムズを店員として雇用。ほかに商品として、観光客だけでなく国際的な「メルオーダー」顧客向けに、象牙の彫刻品、銀器、土産品などを扱う。
- 1896年(67歳) 相変わらずマンダレーの写真スタジオとランゲーンにも支店のある雑貨店を経営。ベアトの写真が何点か、トレンチ・ギャスコイン著、「Among Pagodas and Fair Ladies (仏塔と美女に囲まれて)」に掲載される。
- 1897年(68歳) 35点の写真と共にベアトとの対談が、ジョージ・W. バード著、「Wandering in Burma (ビルマ漫遊記)」に掲載される。ベアトの写真は、アーネスト・ハート夫人著、「Picturesque Burma (絵のように美しいビルマ)」にも登場。1897年から1903年まで、ベアト、地方名鑑に、「写真スタジオ所有者：F. ベアト、支配人：H. C. スミス、助手：A. W. フォーショー、Mg.: ポー・ソー」として載る。
- 1898年(69歳) ベアトの写真を基にした網板の挿絵数枚が、ハッチンソン著、「The Living Races of Mankind (現存の人種)」に掲載される。雑貨店をメートランド・フィッツロイ・キンダーズリイに売却。「F. ベアト商会」という登録商標名は残される。
- 1899年(70歳) 8月、「タイムズ・オブ・ビルマ」紙に、「ランゲーンフェア通りブラックグリフィン所在のF. ベアト商会は、新経営陣となった」との広告。この通告は1901年12月までほぼ毎号繰り返し掲載される。F. ベアト有限会社の他の支店は会社として継続しているが、ベアトは参加していない。ベアトはたびたびプレスに取り上げられ、定期的にイギリス人の社交の場に顔を出す。地元の新聞、ベアトのランゲーン行きを報道。
- 1909年(79歳) 1月29日、ベアト、イタリアのフィレンツェで死去。